

# けものフレンズR Record

新人描画師

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

けものフレンズ二次創作『けものフレンズR』を題材とした三次創作です。

設定原案：祝詞兄貴【<https://www.nicovideo.jp/watch/sm34862414>】

各話ごとに独立した物語であるオムニバス形式の作品です。

時系列や登場キャラクターも各話バラバラとなります。

これといったシナリオも特にありません。

つまりは短編集です。

けものフレンズ2、けものフレンズ全体の名誉及びIPを毀損する目的ではありません。

ん。

【あらすじ】

ジャパリパークを旅するともえちやん達。

これは、そんな彼女達のとある一幕を描いた記録<sup>Record</sup>。

# 目次

おはなばたけ	1
もりのなかで	6
とうぼうせん	14

# おはなばたけ

草花が茂る平原を一台のサイドカー付バイクがのんびりと走っている。

「見て見てイエイヌちゃん。花々があんなにいっぱい!!」

「わあ〜!!とつても綺麗ですね!!」

運転手と同乗者は周囲の平原の景色に笑顔を浮かべながら会話をしている。

バイクに跨っている運転手は幼げな顔立ちを持つ少女。水色で羽根飾りの付いた帽子を飛ばされないよう深く被り、ゴーグルをしっかりと装着してハンドルを握っている。

イエイヌと呼ばれたサイドカーに座っている同乗者も少女。こちらは特に何も被っておらず、頭から生える犬耳が風に靡いてピコピコと小刻みに揺れ動いている。

「ねえイエイヌちゃん? 折角だからこの辺りで少し休憩していかない?」

「いいですね!!是非そうしましょう!ともえさん!!」

「よし!そうと決まったら…」

ともえと呼ばれた運転手はイエイヌの言葉を聞くと、周囲を見渡して丁度よさそうな場所を探し始める。イエイヌもともえと同じように周囲を見渡して、何処か良さそうな

場所を探す。

そうしていると、ちよつと地形が盛り上がって丘のようになってい場所をイエイヌが見つけ、声を掛けながらともえに分かるように指を差した。

「あそこはどうでしょうか？見晴らしも良さそうですよ！」

「あつ！本当だ！じゃあ早速！」

ともえはイエイヌが指差した場所に向かってハンドルを切り、バイクを走らせた。

~~~~~

バイクを麓に止めてから2人は丘を登り、その頂上で腰を下ろして眼下の景色を一望した。

そこから見えたのは見渡す限り一面の花畑の風景。赤色やピンクで花卉を染めた小

さな花が視界いっぱい広がる景に、ともえとイエイヌは目を輝かせた。

「見てくださいともえさん!! ずっとずーつと向こうまでお花畑ですよ!!」

「本当ホント!! 凄い!! めっちゃ絵になるー!!」

目の前の景色に2人は感嘆の言葉を零す。イエイヌは風に乗って漂う花の香りに笑みを浮かべ、ともえは鞆の中からスケッチブックを取り出すと同時に凄まじい勢いで風景を描いていく。

「良い香りがしますね〜……このお花、何と言う名前なのでしょうかね?」

「え? ちよつと待ってね」

イエイヌの言葉にともえは手を一旦止めると、再び鞆に手を入れてガサゴソと何かを探し始めた。

「確か……博士ちゃんから貰った中に……あつた!!」

取り出したのは小さな1冊の本。本の表紙には『小さな図鑑・草花編』と少々掠れた文字が書かれており、取り出したともえはすぐさまページを捲っていく。

「う〜ん……どれだろう?」

「これ……いや、ちよつと違いますね」

本のページをイエイヌと一緒に見ながら、描かれている写真絵を1つひとつ2人で確認して花の名前を探す。そうして暫くの間ページを捲っていくと、漸く周囲に咲く花と同

じものを見つけた。

「あつたこれだ！この花の名前は……『スイートピー』だって！」

「すいーとぴー……ですか？」

「うん！あたし達の目の前にあるのは赤色とピンク色のお花だけど、他にも青色と白色の花もあるんだって」

「へえ〜！」

ともえの話を聞いたイエイヌは近くのスィートピーを1輪だけ手に取ると、その花卉をじつと見つめる。

「……見て見たいですね。青色のこのお花も」

「大丈夫。きつと見られるよ」

少し懂れるように呟いたイエイヌにともえちゃんが声をかける。

「こうしてイエイヌちゃんと旅を続けていれば、絶対見つかるって！」

「あ……！」

「だからそんな顔しない！スケッチブックに曇り顔を描くのはあたしヤダよ？」

再びスケッチブックを開き、ともえは灰色のクレヨンの握った状態でイエイヌのことを笑顔で見つめる。

「ほらほら！もつとニッコリ笑ってイエイヌちゃん!!？折角のめっちゃ絵になる構図な



んだから!!?」

「……ハイ!!?」

そんなともえにイエイヌは顔の横にピンク色のスイートピーを構えると、満面の笑顔を浮かべて元気良く応えた。

~~~~~

ともえのスケッチブックに、新しい絵が加わった。

見渡す限り一面のスイートピーの花畑。

その中心にはスイートピーを携え、満面の笑みを向けているイエイヌの姿。

ページの端には、押し花となった一輪のスイートピーが絵を更に彩るように添えられている。

## もりのなかで

生い茂る葉の隙間から光が差し込む森林の道脇に、サイドカー付バイクが停まっている。

『……コノ程度ノ故障ナラー！時間モアリアア直セルダロウ』

「本当ですかラモリさん!?!?良かつた〜……!」

バイクの前にはともえ、そしてその足元にはサングラスを掛けた赤色のぬいぐるみ？がバイクをじっと観察している。

『シカシ運ガ良カツタナ。走ツテイル最中ニ『エンスト』ヲ起コシタツテノニ、全員無事ナンドカラナ』

ラモリと呼ばれたぬいぐるみは更にバイクに近づき、バッテリーとエンジンに自身の作業用アームを伸ばしてより詳細な状態をチェックし始める。

「ほんつとに焦りましたよ!!!!いきなりガガガッ!!!!っておっきな音がしたかと思ったら、バイクが言うことを聞かなくなっただからですから!!」

冷汗を浮かべながら、ともえはバイク近くの樹木に背を預けて腰掛ける。

「あと少しブレーキが遅かったら……あわわわ」

『危ウク俺モスツ飛ンデクトコロダツタゾ。万が一ノ時ノ対処法ヲともえニ教エテオイテ正解ダツタ』

青ざめるともえを横に、ラモリは軽口を呟きながらバイクの修理を始めた。

『ソウイヤ、イエイヌハドウシタ?』

「あ、えつと、イエイヌちゃんは「折角ですからこの辺りで水を探してきます!!」って言って、水筒を持って行っちゃいました」

そういつてもえは木々の間に指を差す。その方向の地面にはイエイヌの足跡があり、持ち前の嗅覚を頼りに水を探しに行ったようだ。

『ソウカ……フム、コノ辺リハサンドスターノ濃度モ低イカラ、セルリアンモ心配イラナイダロウ』

「そうですか……!」

ラモリは淡々と告げると、無言になってバイクの修理を続ける。一方でともえはラモリの言葉に答えると、鞆の中からスケッチブックとクレヨンを取り出してページを開いた。

~~~~~

『……ナンダ?』

「いえ、お気になさらず。そのまま続けて、どうぞ」

ともえの行動にラモリは思わず作業を止めて訊ねるが、そんなのお構いなしと言わんばかりにともえはクレヨンを走らせる。

『アノヨ?俺ナンカ描イテ楽シイノカ?』

「何言ってるんですか!!楽しいですよ!!めっちゃ絵になりますよ!!」

カツ!!と擬音がしそうなほど目を見開いてともえは言い放つ。因みにクレヨン走らせたままだ。

『……分カラン』

ラモリは呆れたように身体を傾げ、それから再び作業に戻る。

「……そういえばラモリさんって、少し前までは私としかお話しませんよね?」

色の違うクレヨンに持ち替えながら、今度はともえからラモリへ訊ねる。

『ン？アア。俺達ラツキービーストハ元々、コノジャパリパークノ管理維持ヲ行ウコトガ任務ダカラナ。フレンズトノ過度ナ接触ヲシナイヨウニツテコトデ、フレンズト話ガ出来ナカツタンダヨ』

淡々と作業を続けながらラモリはややぶつきらぼうに話す。

「けど、今は普通にイエイヌちゃんともお話してますよね！」

『今ハ……………マア、状況ガ昔トハ色々ト違ウカラナ』

「昔ですか…………？」

ラモリから出た『昔』という単語にともえは首を傾げる。

「その昔。アタシ達と会う前つて、ラモリさんは何処に居たんですか？」

『……………』

ふと、ラモリの動きが止まる。

「……………ラモリさん？」

その様子をともえが声を掛けると、程なくしてラモリは作業を再開した。だが、ラモリは完全に黙り込んでしまい、作業音だけが2人の間に響く。

「あ…………えつと、その…………ごめんなさい」

『イヤ、謝ルコトハ無イゾ？』

自分の言葉が原因だと感じたともえは思わず頭を下げて謝ったが、それにすぐさまラ

モリが言葉を返した。

「いや、だって……」

『少シ『昔』ノコトヲ思イ出シテイタダケダ。怒ツタ訳デハ無イカラ安心シロ』

そう言うトラモリはピヨンと飛び跳ねると、器用にバイクのサドルに着地し、アームを使つてエンジンキーを回す。するとエンジンが掛かる音が響くと同時にエンジンから比較的静かな駆動音が聞こえ始めた。

『ヨシ、修理完了。後ハイエイヌガ戻ッテ来ルノヲ待ツダケダナ』

「そ、そうですね……」

何だか有耶無耶にされたような感じとなつてしまい、ともえは複雑そうな顔を浮かべてしまう。

『イツカハ話ス』

「……え？」

そんなともえを見かねてか、サドルに佇むラモリは身体の向きをともえに向け直してそう言った。

『今ハ言エネエガ、イツカ必ズ話ス……ソノ時ガ来タラナ』

「……」

サングラスを掛けている所為でラモリの目を見ることは出来ない。けれど、何故だか

ラモリが自分に向けている目が見えたような気がした。

『……………』

「……………」

それも、嘘偽りの無い真摯な目がサングラスの向こうに見えた気がした。

「……………分かりました。その時になつたら、私だけじゃなくてイエイヌちゃんにも話してもらいますからね?」

『アア、分かつテイルヨ』

「約束ですからね!」

その言葉を聞いてともえの顔に笑みが戻る。ラモリも肩を竦めるような動きをしながら、サドルから降りようとする。

「ああ!??折角なのでそのまま!!ラモリさんそのまま!!めっちゃ絵になるじゃないですか!!」

『……………エ?』

ともえは思い出したかのようにスケッチブックを開き直し、その勢いのままにクレヨンをこれまた一気に走らせる。

『……………マジカイナ』

ラモリはその光景に唾然となって意図せずその場で固まってしまった。もつとも、そ

れはともえにとって大変都合の良い事であるのだが。

「ともえさくくん！ボスく！お水汲んでまし……!?？」

「そう!!そのまま!!そのアームの角度を維持して!!!!」  
『ア、アガガガガガ………』





# とうぼうせん

月すらも雲に覆われ、完全なる暗闇となった道を1台のサイドカー付バイクと1台の大型クルーザーが並走している。

が、2台の走りはどうも穏やかなものでは無いようだ。

「はああつ!!」

バイクとクルーザーの後方。水色野生だけを瞳開を輝放かせたイエイヌは光の結晶が迸る右手を振り下ろす。放たれたそれは薄緑色の石へを砕きながら抉り取った。



直後、へしを砕かれた『回転りする円盤』を付けたセルリアンはその身体をパッカーン!!させてサンドスターに還元される。が、その後すぐに後続の同型セルリアンが迫り、イエイヌは顔を顰める。

「うう〜!!しつこいですね!!」

『イエイヌちゃん!!一旦戻って!!』

イエイヌの左耳に装着されたインカムからともえの声が聞こえる。その声を聴いてイエイヌがバイクの方へ顔を向けると、バイクを運転しつつも自分の方へ顔を向けてい

るともえの姿があった。

『サイドカーに戻って足を休めて!!』

「は、はい!!」

イエイヌがバイクに戻ろうとしたその時、ともえの右方向、クルーザーの影から一匹のセルリアンが飛び掛かり、ともえを急襲しようとする。

「ともえさんっ!??!」

「きやああつ!??!?!?!」

慌てて跳躍するイエイヌ、ハンドルを握っているが故に何もできないともえ。

「てえいつ!!」

《—————》

その時、突如としてともえに襲い掛かったセルリアンが勢いよく吹き飛ばされ、そのままパツカーン!!となった。

「おい!!余所見するな!!危ないぞ!!」

「ゴマちゃん!! (ゴマさん!!)」

「だから『ゴマ』って呼ぶなって言ってるだろう!??!」

ともえを守ったのは『ゴマ』と呼ばれたフレンズ。斑模様の羽根を頭に持ち、水色の生地に『B e e p!』を印されたシャツを着ており、頭の羽根を羽ばたかせて浮遊して

いる。

「私の名前はロードランナーだって昨日から」

「ゴマちゃん後ろ!!」

「っ!!」

ともえが叫ぶとほぼ同時にG・ロードランナー——愛称ゴマの背後にセルリアンが飛び掛かってくる。

「しやらくさいっ!!」

ゴマはそう叫びながら両の瞳を輝かせ、同時に両足に光の結晶を迸らせて回し蹴りを振り放つ。

《!?!?》

「おりやあつ!!」

振り抜かれた蹴りはセルリアンに深くめり込み、へしに関係なくそのままパッカーン!!とさせた。

「へんっ!!どうだ?ビビッたか?」

尚もクルーザーを追ってくるセルリアンの群れにゴマがそう言うと、心なしかセルリアンは怖気づいたかのように動きを鈍らせた。

「ならこっちから行くぜ!!うおおおっ!!!!」

ゴマは一度クルーザーの屋根に着地すると、今度はそこから跳躍をしてセルリアンの群れに突っ込んでいった。

「バ、ゴマさーん!?」

突撃していったゴマにももえは声を上げるが、ゴマの様子から届いていないか聞こえていないようだ。そんなともえの横に鈍い音と共にイエイヌがサイドカーに戻ってきた。

「イエイヌちゃんっ!?」

「はあ……はあ……だ、大丈夫です……まだ……」

肩で息をするほどに疲弊したイエイヌが枯れた声で呟く。イエイヌが飛んできた方には依然として複数のセルリアンがバイクとクルーザーを追ってきている。

「けど、このセルリアン達の狙いは」

「……うん」

ともえとイエイヌがクルーザーの車内に目を向ける。そこには、助手席に座っている1人のフレنزズの姿があった。

虎模様のロングヘアーをリボンで纏め、黒のベストと緩めた黄色のネクタイが特徴の外見のフレنزズが、グツタリとした様子で席にもたれかかるように寝込んでいる。

『ともえ、イエイヌ、目的地が近クナツテキタ。コレ以上ノ戦闘ハ厳シイゾ』

「!!」

そんな時、2人のインカムにラモリの声が聞こえてくる。クルーザーを運転しながら2人に声を掛けているようだ。

『ソレニイエイヌ、オ前サンノ『野生開放』ハ未熟ナモノダ。コレ以上ハ身体ニ負荷ヲカケル』

「け、けどボス!!?」

ラモリの言葉に反論しようとするイエイヌだが、それをともえが抑える。

「……………どうすれば良い?ラモリさん?」

『アノ鳥ノフレンジヲクルーザーニ呼び戻セ。一カ八カニナルガ、セルリアンヲ一気ニ振り切る』

その言葉を聞いたともえはコクリと頷くと、イエイヌにアイコンタクトを送る。それを察したイエイヌは呼吸を整えると、再びサイドカーを飛び出してセルリアンの群れに向かった。

『ともえ、危ナクナルガ光ヲ消セ。ジャンナイトセルリアンヲ撒ケナイ』

「は、はい!!」

ともえはすぐさまバイクのヘッドライトを消灯し、同時にクルーザーのライトもラモリによって消灯する。そうして、灯り一つ無い完全なる暗闇となった。



踵を返した瞬間にイエイヌの体勢がガクリツと大きく崩れ、慌ててゴマがそれを抱きかかえる。

「どうしたっ!?？」

「あ………が………!!」

イエイヌは何かを発しようとしているが声が出ていない。おまけに両目が野生開放のように光つては消え、光つては消えと不規則に点滅しており、それを見たゴマは即座にイエイヌの異常を察した。

「くそっ!! 一体何なんだよ!!」

ゴマはイエイヌを抱えたまま浮遊し、少々無理矢理だが一気に加速してクルーザの屋根にイエイヌごと身体を着地させた。

「イエイヌちゃんっ!?？」

「それどころじゃないだろ!! 逃げるんだろ!!」

イエイヌの状態を見てともえが叫ぶが、それをゴマが制する。

「オイ!! 変なボス!!」

『任セロ!! ともえ!! 今ハトニカク逃ゲルゾ!! ツイテコイ!!』

ゴマの言葉を受けたラモリはクルーザーを一気に加速させる。急加速で飛ばされそうになるのをゴマはイエイヌを片手で抱えたまま、もう片方の手でハッチの取っ手を掴





た。

「はあ……はあ……っ!! イエイヌちゃんは何?」

「心配ねえよ。寝ちまつてるだけだ」

ハツとなつて声を上げたともえにゴマが答える。ゴマの腕の中にはグツタリとしつつも、規則正しい呼吸を繰り返して眠るイエイヌの姿があった。

「よ、良かった……ありがとうゴマちゃん!!」

「だからゴマじゃねえって言つてんだろ?」

ともえの感謝にゴマが何度目かの声を上げる。

「……? おい、何だあれ?」

『ともえ、見エタゾ』

「!!」

ゴマが何かを見つけ、同時にインカムからラモリの言葉が聞こえ、ともえは正面を向き直す。

『機材が無事ダト良インダガナ……』

バイクとクルーザーの進行方向には、外壁がボロボロになった1棟の建造物が待ち構えるように存在していた。